

春秋繁露通解並びに義証通読稿十四

卷十二〔全〕——陰陽終始第四十八・陰陽義第四十九・陰陽出入上下第五十・天道無二第五十一・暖燠常多第五十二・基義第五十三——

近藤 則之

A Translation of the Ch'un-chiu-fan-lu
and Reading of Yicheng, Part 14

Noriyuki KONDOU

序

本稿は『春秋繁露』の通解を、蘇興の『義証』を通読し、その説に基づきながら試みたものである。今回は卷十二の全文、陰陽終始・陰陽義・陰陽出入上下・天道無二・暖燠常多・基義の七篇について行つた。従来と同じように、本稿においても、本文と注をそれぞれ分離して、通読、通解を行い、注の本来の位置を①・②・③……の記号で示す形式を取っている。また、従来同様、(一)は蘇興の自注を示し、(一)は、訳者注を示す。

底本は、宣統庚戌本『春秋繁露義証』(中文出版社印行本)である。

陰陽終始第四十八

〈本文〉

天の道は、終はりて復た始まる。① 故に北方は天の終始する所なり。陰陽の合別する所なり。② 冬至の後は、陰俛して西入し、陽仰いで東

出し、出入の処、常に相反するなり。多少調和の適、常に相順ふなり。③ 多きこと有るも而も溢ること無し。少なきこと有るも而も絶ゆること無し。春夏は陽多くして陰少なく、秋冬は陽少なくて陰多し。多少常無くして、未だ嘗て分かれて相參ぜずんばあらざるなり。出入を以て相損益し、多少を以て漑濟するなり。④ 多、少に勝つ者は、入るに倍す。⑤ 入る者は一を損して、出づる者は二を益す。⑥ 天の起こす所は、一たび動きて再び倍す。⑦ 常に反衡再登の勢に乗じて、⑧ 以て同類に就きて、之と相報ず。故に其の氣をば相俛みて、変化を以て相輸るなり。⑨ 春秋の中は、陰陽の氣俱に相併ぶなり。中春もて生じ、⑩ 中秋以て殺ぐ。此れによりて之を見れば、天の起こす所は其の氣積み、天の廢する所は其の氣随ふ。⑪ 故に春に至りて少陽東のかた木に就き、之と俱に生じ、夏に至りて太陽南のかた出でて火に就き、之と俱に煖し。此れ各々其の類に就きて之と相起くるに非ずや。少陽は木に就き、太陽は火に就き、火木相称ひて、⑫ 各々其の正に就く。此れ其の倫を正すに非ずや。秋時に至りて、少陽起くるも而も秋を以て金に従ひ、金に従ひて火功を傷つくるを得ず。以て金に従ふを得ずと雖も、亦秋を以て東方に出で、其の処に俛して其の事に適ひて、以て歳功を成す。此れ權に非ずや。陰の行は、固より常に虚に居りて実に居るを得ず。冬に至るも而も空虚に止まる。太陰(「陰」もと「陽」に作る。注によつて改める)は乃ち北して其の類に就くを得て、水と寒を起こす。⑬ 是の故に天の道に倫有り、經有り、權有り。⑭

〈義証〉

①『淮南子』天文訓に、「昼は陽の分なり。夜は陰の分なり。是を以て陽氣勝てば則ち日修くして夜短く、陰氣勝てば則ち日短くして夜修し。帝、四維を張り(もと「維四張」に作る。原典によつて「張四維」に改める)、之を運らすに斗を以てし、日に従ること一辰、復た其の所に反

る。正月は寅を指し、十二月は丑を指す。一歳にして而を為し、終はりて復た始まる」と。

②陰陽は中冬を以て北方に相遇ひ、旋りて復た別行す。故に云ふ、「合別す」と。『漢書』郊祀志に、「樂に別有り、合有り」と。○天啓本「別合」に作る。

③『淮南子』詮言訓に、「陽氣は東北に起こりて、西南に尽く。陰氣は西南に起こりて、東北に尽く。陰陽の始めは、皆調適して相似たり」と。

④俞（樾）云ふ、「溉濟」は即ち『既濟』なり。『損』『益』『既濟』は皆『易』の卦の名なり（『春秋繁露平議』一一）と。興案するに、「溉」も亦沾溉の義なり。

⑤○官本に云ふ、「他本『倍』を誤つて『借』に作る」と。

⑥○官本に云ふ、「他本『出者』の下、六字を闕く」と。興案するに、孫鉞云ふ、「宋本は諸本皆闕く」（典拠未詳）と。

⑦凡そ天の起こす所は、一たび動きて再び其の氣を倍して、以て發生を助く。故に入るには一を損して出づるには二を益す。

⑧○官本に云ふ、「他本下の五字を欠く」と。興案するに、句、疑ふらくは、誤字有らん。

⑨「挾」は猶ほ「挾」のごときなり。天地の運行は、其の理より之を言へば、不変の者なり。消息盈虚し、春は尽くれば必ず夏、秋尽くれば必ず冬、歴劫なるも改まらず。其の氣より之を言へば、則ち多少損益、陰陽迭進、相反し相順ひて、以て其の變化を伸にす。○官本に云ふ、「他本、『輸也』の下、六字を欠く」と。

⑩○官本に云ふ、「他本『春』以下、六字を欠く」と。

⑪言ふところは、委随して振はざるなり。○官本に云ふ、「他本『隨』の字を欠く」と。

⑫○官本に云ふ、「他本『木』を『不』に作る」と。

⑬「太陽」、當に「太陰」と為すべし。『白虎通』五行篇に、「火は盛陽、

水は盛陰なり」と。又云ふ、「水は太陰なり」と。

⑭○盧（文昭）云ふ、「此の篇、日本二十四字を闕く。今、聚珍本に依りて補全す」（『春秋繁露校』）と。

〈本文通釈〉

天道は終われば再び始まる（循環性を持つ）。この結果、北は天道が終わつてまた始まる場所（天道の循環の起点）であり、陰陽が出会いまた離別する場所ということになる。冬至の後、陰は下降して西方に（て地下に）入ると、陽が上昇して東方に（て地上）に出る。（このように陰陽は）出入の場所が常に対称的な関係となつてゐる。（また、陰陽の氣の相互の）量的關係の調和という適合性が（陽が多ければ陰は少なく、陰が増えれば陽が減るというように）常に相互に（相手の量に）従つて（他方の量が決定するというように）保たれてゐる。多くなることが溢れることはなく、少なくなることが尽き果てることではない。

春と夏には陽が多く、陰が少なく、秋と冬は陽が少なく、陰が多い。（このように陰陽はそれぞれ）量が一定であることはなく、（分量的に）相互に（絶対値を一定に保つ形で）分け合いつつ（空間的に）散在し続けている。（陰陽はその地上地下への）出入を契機として（『易』にいわゆる）損益（陰陽の量の増減）が相互に起こり、量の多少によつて（『易』にいわゆる）既濟（万物生成の完成）が起こるのである。（陰陽いずれか）量がなくなつてゐる方が、量が少なくなつてゐる方に（勢力的に）勝つときには、（多くなりゆく方は地上に出ており、地下に）入つて（量が少なくなつて）ゐる方の二倍（の量）となる。（つまり、地下に）入つたものが一ずつ減るのに対して、地上に出てゐる方は、二ずつ増加するのである。（これは）天が興起させるものは、一たび動けば（その量が）二倍となり、……次の「常に反衡再登の勢に乗じて」は、注が句の誤りを指摘しているので強いて訳さない。……（五行の中の）

同類のものに付き従い、それと反応しあう。そこで（天が興起させるものは）その（付き従う五行の中の同類の）氣を身に受けて、（一定の法則の）変化によつて推移していく。

春秋のそれぞれの間（仲春・仲秋）は、陰陽の氣がそれぞれ（量的）均衡を保っている。仲春においては物を生み、仲秋においては物を枯らす、このことから見てみると、天が興起させるもの（春の陽、秋の陰）は、その氣が積極的主導的となり、天が衰微させるものは、その氣が消極的従属的となる（ことがわかる）。故に春になると、少陽が東に地上に出て、（東に位置する）木に付き従い、木とともに万物を生じ、夏になると、太陽が南に出て、火に付き従い、火とともに暑さを出現させる。これらのことは（少陽・太陽が）それぞれ（五行中の）同類に付き従つて、それとともに興起することにはかならない。少陽は木に付き従い、太陽は火に付き従い、火と木はそれぞれ（の性質に）適いつつ、それぞれの本来のあり方を保つ。これこそ（天地自然の本来の秩序たる）「倫」を守ることにかならない。

秋に至ると少陰が起るが、秋だからとて（同類の）金に（金は西方に位置するが、少陰は反対の東方に出るから）付き従うことはできない。（それでも強いて）金に付き従つて、（夏の）火の働きを押し止める。金に付き従うことはできないけれども、それでも秋に東方に出て、自分の在処に伏在して自分の任務を守り、（物を熟させて）一年の稔りの働きを完成させる。これこそ（臨機の妥当性を守るために原則を破る）「權」にはかならない。

陰の動きは、そもそも常に空虚な場所にあつて、実体ある場所にあることができない。冬に至つても空虚な場所を守る。すなわち、太陰が北（という消滅の世界、生々の働きのない空虚な場所）を得て（同じく北に位置する）同類（の水）に付き従つて、水とともに寒さを起こ（して物の消滅後の世界を現わ）す。

陰陽義第四十九

〈本文〉

天地の常は一陰一陽。陽は天の徳なり。陰は天の刑なり。陰陽終歳の行を迹ねて、以て天の親しみて任ずる所を覲る。① 天の功を成すも、猶ほ之を空と謂ふは、空なる者の実なり。② 故に清潔の歳に於けるや、酸醎の味に於けるが若きなり。僅かに有るのみ。③ 聖人の治も亦従りて然り。天の少陰は功に用ひ、④ 太陰は空に用ふ。人の少陰は嚴に用ひて、太陰は喪に用ふ。喪も亦空、空も亦喪なり。⑤ 是の故に天の道は三時を以て生を成し、一時を以て死に喪す。之に死する者は、百物の枯落と謂ふなり。之に喪する者は陰氣の悲哀と謂ふなり。天も亦喜怒哀樂の心有りて、人と相副ひ、類を以て之を合す。天人は一なり。春は、喜氣なり。故に生ず。秋は怒氣なり。故に殺す。夏は樂氣なり。故に養ふ。冬は哀氣なり。故に蔵す。⑥ 四者は天人同じく之を有し、⑦ 其の理有りて一なり。之を用ふること天と同じき者は大いに治まり、天と異なる者は大いに乱る。故に人主と為るの道は、身の天と同じき者に在りて之を用ふるより明かなるは莫し。喜怒をして必ず義に当たりて出づること、寒暑の必ず其の時に当たりて乃ち発するが如くならしむるなり。徳をして刑よりも厚きこと、陽の陰よりも多きが如くならしむるなり。是の故に天の陰氣を行ふや、少しく取りて以て秋を成し、其の余は以て之を冬に帰す。聖人の陰氣を行ふや、少しく取りて以て嚴を立て、其の余は以て之を喪に帰す。⑧ 喪は亦人の冬氣なり。故に人の太陰は、刑に用ひずして喪に用ふ。⑨ 天の太陰は、物に用ひずして空に用ふ。空も亦喪と為す。喪も亦空と為す。其の実は一なり。皆死亡に喪するの心なり。

〈義証〉

①基義篇（第五十三）に「親しみて任ずる有り」と。

②陰の空虚に処りて、陽の歳を成すを佐くる、是れ其の実なり。而して名は猶ほ空と為す。

③俞謂ふ、「清」「溧」は同義なり。「酸」「鹹」を以て比と為すを得ず。煖燠孰多篇（第五十二）に云ふ、「薫に非れば、育すること有る能はず。溧に非れば、熟すること有る能はず」と。又云ふ、「薫と溧と其の日孰か多き」と。皆「薫」「溧」を以て相對して義を為す。疑ふらくは、此こも亦當に「故に薫溧の歳に於けるや、酸鹹の味に於けるが若きなり」と云ふべし。浅人「薫」「溧」を見ること罕なり。故に誤つて改むるのみ（『春秋繁露平議』一二）と。輿案するに、俞説誤れり。此れ天の陰氣を用ふること少なきを言ふなり。「薫」と「溧」と文を對にすること、猶ほ陰陽のごときなり。「僅かに有り」と云ふ能はず。酸鹹も亦是れ五味に於いて之を偏拏す。煖燠孰多篇に云ふ、「故に其の跡を案じ、其の実を数ふるに、清溧の日は少のみ」と。正に此の義なり。○官本に云ふ、「溧」、他本誤つて「潭」に作る」と。

④秋は以て物を熟す。故に「功」と云ふ。上篇に所謂る「秋は歳功を成す」なり。

⑤「空」は「虚」なり。天文に、虚宿は北宮に在り。虚は丘に従ひ、哭泣の事を為す。故に此こに「空」「喪」を以て互釈するなり。『釈名』（釈天卷二）に、「霜は喪なり。其の氣は慘毒にして、物皆喪するなり」と。又云ふ、「凶は空なり。空亡に就く」（釈言語卷四）と。

⑥『御覽』一に引いて四つの「也」の字無し。

⑦語は亦王道通三篇（第四十四）に見ゆ。○「天も亦喜怒の氣有り」より以下此に至るまで、並んで『御覽』一の引に見ゆ。其の上文に則ち、「天に十端有り」云々と云ひて、「凡そ十端なり」に至る。『法苑珠林』（卷七）地動篇引いて同じ。『芸文類聚』一も亦「天に十端有り」を引い

て、「天人一なり」に至りて止む。見る所相合ふに似たり。今「天に十端有り」の数語は、官制象天篇（第二十四）に有り。疑ふらくは、唐宋本と同じからず。

⑧○凌（曙）本、「以」の字無し。

⑨刑は嚴なるのみ。過慘を取る無し。故に秋に法りて、冬に法らず。

〈本文通釈〉

天地自然の恒常性（を示すもの）は一陰一陽（の作用）である。陽は天の徳（を體現するもの）であり、陰は天の刑（を體現するもの）である。陰陽が一年の四季変化を遂げる動きを跡づければ、天が何を親任するか觀察される。（陰は）天の働きを（最終的に）完成させるのに、それでもそれを空と呼ぶのは、（空という方が）空なる（語で呼ばれる）ものの実体だからである。というのは、（陰の属性を持つ）清溧や酸っぱさ鹹^{しほ}けは、（それぞれ）一年の稔りや味の中でのほんのわずかしが存在していないからである。聖人の政治も（この陰陽の原理に）従つて同様のものとなる。

天の少陰は（物の成長を止め、物を枯らし熟させる）功績（の実現）において働き、太陰は（物の消滅後の世界、生々の活動も消滅の活動もない）空において働く。人の少陰は嚴格さとして働き、太陰は喪として働く。喪も（自然界における）空の一環であり、空は（人間界における、社会的活動のない）喪に当たる。つまり、天の道は、春夏秋冬の三つの季節を通じて生々活動を完成させる、冬の一季を通じて、死滅した物に対する喪を行っているのである。（この場合に）死滅することを百物の枯落と表現し、喪に服すること（に当たる冬の情景）を陰氣の悲哀と表現する。

天にも（人と同様に）喜怒の氣と哀樂の心があつて、人と対応しており、（人と天は）同類の關係にあるのであり、（この意味において）天人

は同じものである。春は（天の）喜びの氣（による現象）である。そこで物を生ずるのである。秋は（天の）怒りの氣（による現象）である。そこで物を枯らすのである。夏は（天の）樂しみの氣（による現象）である。そこで（生じた物）を養うのである。冬は（天の）哀しみの氣である。そこで収蔵するのである。

（これら喜怒哀樂の）四つの事柄は天人がいずれも具有するものであり、（この四つの事柄には、その発現の仕方）その理法があつて（天人ともに）同一である。その（理法の）用い方が天と同じ場合には大いに治まり、天と異なる場合には大いに乱れる。そこで人主となる方法は、（自己の）身中の天と同じ要素においてそれを用いることほど明らかなことはない。（すなわち、自己の）喜怒（の心）が必ず義に当たつて発すること、寒暑が必ずしかるべき季節に当たつて発現するようにし、徳が刑よりも厚いこと、陽が陰よりも多いようにするのである。つまり、天が陰氣を運用するには、少々取つて秋を實現し、それ以外はすべて冬の実現に当てる。（それと同様に）聖人が（自己の身の）陰氣を用いる場合には、少々取つて嚴格さを実現し、それ以外はすべて（死を悼む）喪に当てるのである。喪はまた人における冬の氣でもある。そこで人の（身の）太陰は、（天の太陰が、物を消滅させる秋にではなく、物を地下に収蔵する冬に用いられるように、人を殺す）刑ではなく、（人を地下に埋葬してその死を悼む）喪に用いるのである。天の太陰は（直接）物（の生殺）に用いられず、（物の収蔵という生殺と関わりのない）空に用いられる。空は（人では）喪であり、喪は（自然界における）空であり、その実質は同じであり、いずれも死に亡んだものに対する喪に服する心情である。

陰陽出入上下第五十

〈本文〉

天の大數（もと「天道大數」に作る。注によつて「天之大數」に改める）は、相反するの物なり。① 俱に出づるを得ず。陰陽、是れなり。春は陽を出だして陰を入れ、秋は陰を出だして陽を入れる。夏は陽を右にして陰を左にし、冬は陰を右にして陽を左にす。陰出づれば則ち陽は入り、陽出づれば則ち陰は入り、② 陰右なれば則ち陽は左に、陰左なれば則ち陽は右なり。是の故に春は俱に南して、秋は俱に北するも、而も道を同じくせず。夏は前に交はり、冬は後に交はるも、而も理を同じくせず。並び行きて相乱さず。澆滑して各々分を持つ。③ 此れを之れ天の意と謂ふ。而して何を以て事に従ふ。④ 天の道は、初めて大冬に薄るや、陰陽各々一方より来たりて、後に移る。陰は東方より来たりて西し、陽は西方より来たりて東す。中冬の月に至りて、北方に相遇ひ、合して一と為る。之を「至」と謂ふ。別れて相去り、陰は右に適き、陽は左に適く。⑤ 左に適く者は其の道は順なり。右に適く者は其の道逆なり。逆氣左より上り、順氣右より下る。故に下は暖かくして上寒し。此を以て天の冬は陰を右にして陽を左にし、右にする所を上にし、左にする所を下にするを見るなり。冬月尽きて、陰陽は俱に南に還り、陽は南に還りて寅に出で、陰は南に還りて戌に入る。⑥ 此れ陰陽の始めて地に^{おほ}出で地に入る所の見処なり。中春の月に至りて、⑦ 陽、正東に在り、陰、正西に在る、之を春分と謂ふ。春分とは、陰陽相半ばするなり。故に昼夜等しくして寒暑平らかなり。⑧ 陰は日に損して随ひ（もと「随」の下に「陽」字有り。注によつて符とする）。⑨ 陽は日に益して鴻いなり。⑩ 故に暖熱を為す。⑪ 始めて大夏の月を得て、南方に相遇ひて、合して一と為る。之を日至と謂ふ。別れて相去り、陽は右に適き、陰は左に適く。左に適くには下よりし、右に適くには上よりし、上暑く

して下寒し。此を以て天の夏に陽を右にして陰を左にするを見るなり。其の右にする所を上し、其の左にする所を下す。夏月尽きて陰陽俱に北還す。陽は北還して申に入り、陰は北還して辰に出づ。⑫ 此れ陰陽の始めて地に出で地に入る所の見処なり。中秋の月に至り、⑬ 陽は正西に在り。陰は正東に在り。之を秋分と謂ふ。⑭ 秋分は、陰陽相半ばするなり。故に昼夜均しくして寒暑平らかなり。陽は日に損して随ひ（もと「随」の下に「陰」字有り。注⑨によつて衍とする）、陰は日に益して鴻いなり。故に季秋に至りて始めて霜ふり、孟冬に至りて始めて寒し。⑮ 小雪にして物咸成り、大寒にして物畢く蔵して、天地の功、終はる。⑯

〔義証〕

①「道」疑ふらくは、「之」に作りしか。「數」は即ち「道」なり。下篇に云ふ「天の常道」と。証す可し。

②○凌本、「陽入れば則ち陰出づ」に作る。

③『乾鑿度』に、「並んで治まりて交々錯行す。間時にして六辰を治む」と。『荀子』解蔽篇に、「案ち直だに將に怪説を治め、奇辭を玩びて以て相撓滑するなり」と。楊注に、「滑」は「乱」なり。音、骨」と。此れ言ふところは、陰陽、交遣の時有りと雖も、然れども各々其の分を持ち、旋ち合ひ旋ち別れ、相凌厲せず。『礼』喪服四制に云ふ、「夫れ礼は吉凶道を異にし、相干さざること、之を陰陽に取るなり」と。

④天の意を体する者は、従ふ所の事を知らざる可けんや。

⑤○官本に云ふ、「他本、下の『適左』の二字を脱す」と。

⑥凌云ふ、「尚書攷靈曜」に、「仲夏には、日、寅に出で、戌に出づ」と。

⑦凌云ふ、「仲」は「中」なり。『仲春』に、日月、降婁に会して、斗卯の辰に建つなり」と。

⑧凌云ふ、「詩」（東方未明）の疏に、按ずるに、「乾象曆」及び諸曆法

と今の大史の候する所とに、皆云ふ、冬至には則ち昼四十五にして夜五十五。夏至には則ち昼六十五にして夜三十五。春秋分には則ち昼五十五半にして夜四十四半。春分より夏至に至るまでは、昼漸く長く、増すこと九刻半。夏至より秋分に至るまでは、減ずる所亦之くの如し。秋分より冬至に至るまでは、昼漸く短く、減ずること十刻半。冬至より春分に至るまでは、加ふる所亦之くの如し。歴ちて昼夜と謂ふは、昏明を以て限と為す。馬融・王肅、『尚書』に注して、以為らく、日永には則ち昼漏六十刻、夜漏四十刻。日短には則ち昼漏四十刻、夜漏六十刻なり。日中・宵中には則ち昼夜各々五十刻なりとは、『尚書』（堯典）に日出日入の語有るを以て、遂に日見を以て限と為す。『尚書緯』、刻を謂ひて商と為す。鄭（玄）、『士昏礼目錄』を作りて云ふ、『日入りて三商を昏と為す』とは、全數を挙げて言ふのみ。其の實、日見の前、日入の後、昏明を距つること各々二刻半なり。昼は五刻を尽くして以て夜を裨ふ。故に曆法に于いて皆多く五刻を校するなり」と。

⑨陰陽は道を異にし、相隨ふを得ず。陽尊陰卑（第四十三）及び天弁在人篇（第四十六）に、「隨陽」の二字有りと雖も、陰陽相隨ふを謂ふには非ざるなり。此の「陽」の字は、疑ふらくは下に縁りて衍せしならん。『隨』は、委隨を謂ふ。陰陽終始篇（第四十八）に云ふ、「天の廢する所は、其の氣隨ふ」と。即ち此の義なり。『隨』と「鴻」と対文にして、猶ほ消息と言ふがごとし。下文の「隨陰」も亦「陰」の字を衍す。董子の「雨雹対」に云ふ、「十月より已後は、陽氣始めて地下に生じ、漸やく流散す。故に息と言ふなり。陰氣は転た収まる。故に消と言ふなり。四月より以後は、陰氣始めて天上に生じ、漸やく流散す。故に息と云ふなり。陽氣は転た収まる。故に消と言ふなり」と。

⑩「鴻」は猶ほ「大」、「長」のごときなり。

⑪○官本に云ふ、「他本、『暖』を『燒』に誤る」と。

⑫凌云ふ、「尚書攷靈曜」に、「仲冬には、日、辰に出で、申に入る」と

と。

⑬凌云ふ、「〔礼記〕」月令の注に、「仲秋には、日月、寿星に会して、斗、酉の辰に建つ」と。

⑭凌云ふ、「河図に曰く、『地に四遊有り。冬至には、地、北に上行して西すること三万里。夏至には、地、南に下行して東すること三万里。春秋二分は、是れ其の中なり』と。〔礼記〕」月令の疏に、「鄭、『考靈曜』に注して云ふ、『地蓋は厚き三万里。春分の時、地は正に中に当たる。此れより地漸漸として下り、夏至の時に至るまでに、地、下遊すること万五千里。地の上畔、天中と平らかなり。夏至の後、地漸漸として上に向かひ、秋分に至りて、地正に天の中央に当たる。此れより地漸漸として上り、冬至に至るまでに、上遊すること万五千里。地の下畔、天中と平らかなり。冬至より後は、地漸漸として下る。此れ是れ地の三万里の中を升降するなり。但だ、渾天の体は、地を繞ると雖も、地は則ち中央正平にして、天は則ち北高く南下し。北極は地より高きこと三十六度、南極は地より低きこと三十六度。然れば則ち北極の下は、常に見えて没せず。南極の上三十六度は、常に没して見えず。南極は北極を去ること一百二十一度余なり。若し逐曲して之を計れば、則ち一百八十一度余なり。若し南極の前半を以て之を言へば、之を赤道と謂ふ。南極を去ること九十一度余、北極をさること九十二度余なり。此れ是れ春秋分の日道なり」と。

⑮凌云ふ、「〔礼記〕」月令注に、「季秋には、日月、大火に会して、斗、戌の辰に建つなり。孟冬には、日月、析木の津に会して、斗、亥の辰に建つなり」と。○盧云ふ、「旧本『寒』の上に『大』の字を衍す」と。

⑯凌云ふ、「御覽」に、「〔三礼義宗〕」に、十月立冬を節と為すは、冬は終なり。立冬の時、万物、成を終ふ。因りて節名と為す。小雪を中と為すは、氣叙いで転た寒く、雨變じて雪と成る。故に小雪を以て中と為す。』(以上卷二十八)『十二月小寒を節と為すは、亦大寒に形る。故に之を小

と謂ふ。時寒けれども亦未だ是れ極まらざるを言ふなり。大寒を中と為すは、上に小に形るなり。故に之を大と謂ふ。十一月、一陽の交はり初めて起こり、之に至りて始めて徹す。陰氣地に出で方に尽くし(もと「尽」字無し。原典によつて補う)、寒氣併せて上に在り。寒氣の逆、極まる。故に大寒と謂ふなり(以上卷二十六)』と。○盧云ふ、「旧本、『小雪』を誤つて『下雪』に作る」と。

〈本文通釈〉

天の偉大な原理は相互に相反する(二物(に象徴されるの))であり、(その二物は)同時に(地上に)出現することはできない。陰陽がそれぞれである。

(天は)春に陽を(地上に)出して、陰を(地下に)入れ、秋は陰を出して陽を入れる。夏は陽を(地上中央より南に向いて)右に置き、陰を左に置き、冬は陰を右に置き、陽を左に置く。陰が出るとき陽は入り、陽が出るとき陰は入り、陰が右にあれば陽は左にあり、陰が左にあるときは陽は右にある。この結果、春は(陰陽)ともに南に向かい、秋はともに北に向かうが、(地上と地下及び右と左の違いがあつて)その軌道を同じくすることはない。

夏は前(南)で交差し、冬は後ろ(北)で交差するが、道筋を同じくすることはない。並行する場合も、(両者は地上と地下の位置の違いがある)ので相互に(運行を)乱さず、入り乱れて(いるように見えながら)それぞれ(軌道に従つて)分を守り続ける。こうした(陰陽の運行に示される、陰陽がそれぞれその分を守り続ける)ことこそ天の意志と言うのである。

(それでは陰陽は)どのようにして(天の与えた自己の)任務に従っているのだろうか。天の道においては、真冬に近づくころ、陰陽は各々それぞれの方向から(巡つて)きて、後(北)に移動していく。陰

は（地上を）東方から西向きに、陽は（地下を）西方から東向きに（巡り来て）、仲冬の月になると、北極で出会い一体となる。これを（冬至）と言う。（その後）分かれて（互いに）離れると、陰は（地上を、南を正面として）右方向へ向かい、陽は（地下を、南を正面として）左方向へ向かう。左に向かうものは、その軌道は順道であり、右に向かうものは、その軌道は逆道である。（このように冬は）逆（道を進む陰）氣が左から（右に向かつて）地上に上り、順（道を進む陽）氣が右から（左に向かつて）地下に下る。この結果、地下は暖かく地上は寒くなるのである。以上のことから、天が冬に陰を右に向かわせ、陽を左に向かわせ、右に向かわせるものを上に置き、左に向かわせるものを下に置くことが分かる。

冬が終わると、陰陽はともに南向きに巡るが、陽は南向きに巡って寅の方角から（地上に）出、陰は南向きに巡って戌の方角から（地下に）入る。これらの位置が、陰陽が（一年の内）初めて地上に出、（また）地上に入る明確な場所である。

仲春の月になると、陽は（地上を巡って）真東に位置し、陰は（地下を巡って）真西に位置する。これを春分と言う。春分には陰陽（の勢力）が相半ばする。そこで昼夜（の時間）が等しくなり、寒暑も平均化する。（この日以降）陰は日増しに（勢力が）衰え終息に向かい、陽は日ごと（勢力が）増して盛大となる。

初めて真夏を迎える月、（陰陽は）南極で出会い一体となる。これを夏至と言う。（その後）分かれて（互いに）離れると、陽は（地上を）右方向へ向かい、陰は（地下を）左方向へ向かう。左に行くもの（陰）は地下を通り、右に行くもの（陽）は地上を通る。（この結果、夏は）地上が暑く、地下が冷たいのである。このことから天が夏に陽を右に向かわせ、陰を左に向かわせ、右に向かわせるものを上に置き、左に向かわせるものを下に置くことが分かる。

夏が終わると、陰陽はともに北向きに巡るが、陽は北向きに巡って申の方角から（地下に）入り、陰は北向きに巡って辰の方角から地上に出る。これらが陰陽が（二年の内）初めて地上へ出、（また）地下へ入る明確な場所である。

仲秋の月になると、陽は（地下を巡って）真西に位置し、陰は（地上を巡って）真東に位置する。これを秋分と言う。秋分には陰陽（の勢力が）相半ばする。そこで昼夜（の時間）が等しくなり、寒暑も平均化する。（この日以降）陽は日増しに（勢力が）衰え終息に向かい、陰は日ごとに（勢力が）増して盛大となる。そこで季秋（九月）に至ると初めて霜が降り、孟冬（十月）に至って初めて寒くなり、小雪となつて物はすべて成熟を遂げ、大寒に至ると物はすべて（地中に）収蔵され、天地の（四季実現の）功績が終わりを告げるのである。

天道無二第五十一

〈本文〉

天の常道は相反するの物なり。兩つながら起るを得ず。故に之を一と謂ふ。一にして二ならざる者は、天の行なり。陰と陽とは相反するの物なり。故に或いは出で或いは入り、或いは右し或いは左す。① 春は俱に南し、秋は俱に北し、夏は前に交はり、冬は後に交はり、並び行くも而も路を同じくせず。交会して各々代はり理む。此れ其の文か。② 天の道は、一たび出一たび入り、一たび休し一たび伏すること有り。其の度は一なれども、然而れども意を同じくせず。③ 陽の出づる、常に前に縣かりて歳事に任ず。陰の出づる、常に後に縣かりて空虚に守る。陽の休するや、功已に上に成りて下に伏す。陰の伏するや、義に近づくを得ずして其の処を遠ざく。④ 天の陽に任じ陰に任せず、徳を好みて刑を好まざること是くの如し。故に陽出でて前み、陰出でて後くは、徳

を尊びて刑を卑しむの心見はる。陽出でて夏に積むは、徳に任じて以て歳事を成す（「成」の字もと無し。注によつて補う）なり。⑤ 陰出でて冬に積むは、刑を空処に錯くなり。⑥ 必ず此を以て之を察すれば、⑦ 天は物に常無くして時に一なり。時の宜しき所にして一もて之を為す。⑧ 故に一を開き一を塞し、一を起し一を廃し、畢はるに至るの時にして止むも、終はれば有復た一に始まる。⑨ 一とは一なり。⑩ 是れ天に於いて凡そ陰位に有る者は皆惡にして善を乱し、⑪ 主名を得ず。天の道なり。故に常に一にして二（もと「滅」に作る。注によつて改める）ならざるは、⑫ 天に法（もと「法」の字無し。注によつて補う）るの道なり。⑬ 事は大小と無く、物は難易と無く、天の道に反すれば、成る者無し。是を以て目は二つながら視る能はず。耳は二つながら聴く能はず。⑭ 手は二つながら事とする能はず。⑮ 一手もて方を画き、一手もて円を画けば、成す能はず。⑯ 人、小易の物を為すも、而も終ひに成す能はず。天に反するの行ふ可からざることは是くの如し。⑰ 是の故に古の人物にして文を書するに、心、一の中に止まる者、之を忠と謂ひ、二の中を持する者、之を患と謂ふ。患は人の中の一ならざる者なり。⑱ 一ならざる者は、故より患の生ずる所由なり。是の故に君子は二を賤しみて一を貴ぶ。⑲ 人、孰か善無き。善、一ならず。故に以て身を立つるに足らず。治、孰れか常無き。常、一ならず。故に以て功を致すに足らず。詩（大雅、文明）に云ふ、「上帝、汝に臨む。爾が心を二にする無かれ」と。天道を知る者の言なり。⑳

〈義証〉

①〇 凌本、「或左或右」に作る。

② 語、上篇と略ぼ同じ。

③ 基義篇（第五十三）に、「遠近度を同じくして、而も意を同じくせず」と。

④ 「義」の字疑ふらくは誤りならんと。

⑤ 「歳」の上、疑ふらくは「成」の字有りしか。或いは「歳」を「成」の誤りと為す。

⑥〇 凌本「刑」を「行」に作る。

⑦〇 天啓本、「必」を「小」に作る。

⑧ 陽陰は両つながら盛んならず。故に曰く、「二もて之を為す」と。

⑨ 即ち貞下起元の理なり。○ 盧云ふ、「旧本、『至』字の上に『而』字有り。衍なり。『有』、『又』と同じ。『於二』、旧本『其一』に作る。誤てり」と。

⑩ 此れ同字もて相訓ず。『易』（剥卦）象の詞に、「剥は、剥なり」と。本書五行相生篇（第五十八）に「行は行なり」と。『釈名』釈天に「宿は宿なり」と。並んで此の例なり。

⑪ 陽尊陰卑篇（第四十三）に、「惡の属は尽く陰と為す」と。「乱善」の二字は疑ふらくは誤り有らんと。○ 「是於」、凌本「是故」に作る。

⑫ 「滅」、疑ふらくは「二」に作りしかと。

⑬ 「天」の上、疑ふらくは、「法」字を脱せしかと。

⑭ 「荀子」勸学篇に、「目は両つながら視て明なる能はず。耳は両つながら聴きて聰なる能はず」と。

⑮〇 凌本「手」の上に「二」の字有り。

⑯ 「韓非子」功名篇に、「人臣の憂ひは、一を得ざるに在り。故に右手もて円を画き、左手もて方を画けば、両つながら成す能はず」と。又外儲説左下に、「子綽曰く、『人能く左もて方を画きて右もて円を画く莫し』」と。『新論』に、「使し左手もて方を画き、右手もて円を画き、令し一時に俱に成さば、規矩の心を執り、剡剡の手を廻らすと雖も、能はざるは、心は両つながら用ふる能はずして、則ち手は併せて運らざればなり」と。『論衡』書解篇に、「雀に弾けば則ち鵲を失し、鵲に射れば則ち雁を失す。方円の画は俱には成らず。左右の視は並びには見えす。人材は両

為有れば、一も成す能はず」と。

①賢良策（第二策）に云ふ、「其の道を絶ち、並び進ましむる勿かれ」と。即一の説なり。

①⑧『説文』（卷五十五）に、「患」は、憂なり。心、上に^{くわ}患を貫ぬくに從ふ。患は亦声なり」と。段玉裁云ふ、「当に『心に從ふ、患の声』に作るべし。古形、横直定まり無し。『目』の字、偏旁皆『𠂔』に作るが如し。『患』の字の上は患に从ふ。或いは之を横にして『申』に作る。而して又析ちて二の中の形と為す。蓋し『申』に類するを恐るるなり。董氏の所説は、字の本形に非ず。古、『𠂔』を多く『申』に作る。『広韻』に、『申』は『穿』なり」と。『親申』は即ち『親𠂔』なり。『貫』は習なり。大雅（皇矣）に、『申ひて夷に載ち路なり』と。伝に曰く、『申は習なり』と。蓋し其の字、本『𠂔』に作りしならん。『愼』『損』は字の段借と為す」と。輿案するに、董は字形を以て義を説く。仁を釈して人と為し、義を我と為し、性を生と為すが如きは並んで其の例なり。段、『申』を以て『𠂔』と為すは、則ち形義離る。『晏子春秋』・『列女伝』母儀篇・『説苑』説叢篇、並んで云ふ、「心を一にして以て百君に事ふべし」と。『荀子』勸学篇に、「両君に事ふる者は容れられず」と。『淮南子』兵略訓に、「二心もて君に事ふ可からず」と。此の義と合ふ。（明・魏校）『六書精蘊』に、「一中を忠と為し、二忠を患と為す」と。董説を用ふ。○盧云ふ、『物而書文』は疑ふらくは、『物』を当に『象』に作るべし。趙敬夫云ふ、『物は当に物を物として物に物とせられずの義なるべし』と。『心止於一中者』は、旧本、『心』字『中』字を脱す。今増す」と。又下の両の『中』の字、旧並んで『忠』に訛る。今改正す」と。輿案するに、『物而書文』は、物に因りて其の文を書するを謂ふ。義自づから通ず可し。

①⑨『春秋』の一統を大ぶは、即ち一を貴ぶの義なり。『荀子』勸学篇に『詩』を引きて云ふ、「淑人君子、其の儀一なり。其の儀一にして、心結ぶが如し。故に君子は一に結ぶなり」と。又致士篇に、「君は国の隆な

り。父は家の隆なり。隆一にして治まり、二にして乱る」と。『礼（記）』坊記に、「子云ふ、『天に二日無く、土に二王無し。無二の上を尊びて、民に君臣の別有るを示すなり』と。喪服四制に云ふ、『天に二日無く、土に二王無く、国に二君無く、家に二尊無し。一を以て之を治むるなり』と。

②⑩盧云ふ、『爾』、本亦『汝』に作る」と。

〈本文通釈〉

天の不変の原理は相互に相反する（二）物（に象徴されるの）であり、（その二物は）同時に働くことはできない。その意味で、（天の原理を）一と呼ぶ。一であつて二となることはないのが天の営みである。陰と陽とは相反する物である。そこで一方が（地上に）出れば、他方は（地下に）入り、一方が右にあれば、他方は左にある。春はともに南方方向に巡り、秋はともに北方方向に巡り、夏は（南向きに立つ視点から見ても）前（南）で交差し、冬は後ろ（北）で交差し、並行する場合もあるが軌道を同じくすることはなく、（夏と冬に）出会つてはそれぞれ交代して（それぞれの季節を）治める。こうしたことこそ（天道が示す）文理に他なるまい。

（陰陽の運行に示される）天道においては、出たり入ったり、休息したり潜伏したり（と様態が変遷）する。その運行距離は（軌道を異にしつつも）同じであるが、しかし、（陰陽の運行が持つ）意味は同じでない。

陽は（地上に）出ると、常に（地上にある間は、南向きの視点から見ても）前面（南）で（天空に）懸かり、一年の稔り（を実現する任務）の事に就く。陰は地上に出ると、常に（地上にある間は）背後（北）で（天空に）懸かり、（物の生々にも消滅にも働きを示さない）空虚（の立場）を守る。陽が休息する時は、（物の生々と成長の）功績はすでに地

上で実現しており、(その段階で) 地下に休息する。陰が潜伏する時：以下、「不得近義而遠其処也」は注が字の誤りを指摘しており、敢えて訳さない。……

天は(物の生々、成長については) 陽に任じて陰には任じない。天が徳を好み、刑を好まないこと、この通りである。そこで陽が(地上に出ると前面(南)にあり、陰が出ると背後(北)にあるのであり、この点に、天の) 徳を尊び刑を賤しむ心意が現れている。陽が(地上に出て夏の間に(勢力を) 積み上げるのは、(天が) 徳に任じて一年の物の生々成長(稔り)を実現することなのである。陰が(地上に) 出て冬の間に勢力を積み上げるのは、(天が) 刑を(働きのない) 空虚な場所に置くことなのである。必然的にこの(陰陽の) ことからこの(天の意図の) ことが察せられる。

天は物に対して恒常性与えず、季節(の巡り)を一定にしている。季節の適宜性は(陰陽のいずれか) 一つの実現する。そこで(陽の) 一方だけを開放し、他方(の陰)は塞ぎ、(陽の) 一方だけに活動を起こさせ、他方(の陰)には活動を止める。(その場合、陽の活動は) 最終段階まで至って(活動を) 停止するが、終われば(今一方の陰から始まるのではなく) 再度(陽の) 一方から始まる。(この) 一とは(二者の並列や連続を意味しない) 一(という意味)である。

以上のことは天の世界において、すべて陰の位にあるものは皆悪であつて善を乱すということであり、(またそれが) 主体者の名を得ないということであり、(それこそが) 天の道である。従つて常に一であつて、二とならないあり方こそ(次に示すように) 天に法する方法なのである。

事物は大小や難易に関わりなく、天の道に反すれば完成成功することはない。すなわち、目は(同時に) 二つのものを見ることはできず、耳は(同時に) 二つのことを聞くことはできず、手は(同時に) 二つのことを処理できない。一方で方形を画きながら、他方で円形を画くならば、

(どちら) うまくいかない。(まことに) 人はちつぽけで簡単なことをなしても、(同時に二つのことをなせば) 結局うまくいかない。天(の原理)に反することがうまくいかないことこの通りである。そこで古代の賢者が文字を記した時、心を一つの中(焦点)に止める者を「忠」と表し、二つの中(焦点)を持つ者を「愚」と表した。「愚」とは、人の(心)の中(焦点)が一つではないということである。(心の焦点が) 一ではない者は、むろん愚いが生じる原因である。そこで君子は二を賤し(み)を貴ぶのである。

人は善でない者はない。(ところが) 善が一つ(に定つたもの)でないから、身を立てることができないのである。政治は定法を持たない場合はない。(ところが) 定法が一つ(に定まつたもの)でないから、治効を挙げることができないのである。詩経(大雅、文明篇)に、「上帝なんじに臨めり。なんじの心を二つにするなかれ」とあるのは、天道を知る者の言葉である。

暖燠常多第五十二

〈本文〉

天の道は陽を出し暖を為して以て之を生み、陰を出し清を為して以て之を成す。是の故に薫に非れば育すること有る能はず。溧に非れば熟すること有る能はざるは、歳の精なり。心を治め(「治」もと「知」に作る。注によつて改める)て薫と溧と孰れか多きを省みざる者は、①之を用ひて必ず天と戻る。天と戻れば、勞すと雖も成らず。②正月(もと「正月」の上に「是」の字あり。注によつて衍とする)より十月に至りて、天の功畢はる。③其の間を計るに、陰と陽と各々居ること幾何ぞや。④薫と溧と其の日孰か多き。⑤物の初めて生ずるを距てて、其の畢く成るに至るまでに、露と霜と其の下ること孰れか倍す。故に中

春より秋に至るまで、気は溫柔和調す。季秋九月に及んで、陰乃ち始めて陽より多し。⑥ 天、是に於いて時に溼を出し霜を下す。⑦ 溼を出し霜を下して、天の降物固より已に皆成る。⑧ 故に九月は、天の功大いに是の月に究まるなり。十月にして悉く畢はる。⑨ 故に其の跡を案じて、其の実を数ふれば、清潔の日は少少のみ。功已に畢く成るの後、陰大いに出自。天の功を成すや、少陰は与るも而も太陰は与らず。少陰は内に在りて太陰は外に在り。故に霜、物に加はりて、雪は空に加はる。⑩ 空は亶だ地のみ。物に逮ばざるなり。⑪ 功已に畢く成るの後、物未だ復た生ぜざるの前は、太陰の当に出自べき所なり。⑫ 陰と曰ふと雖も、⑬ 亦太陽を以て其の位に資化して、而も之を受くる所を知らず。⑭ 故に聖主の上位に在りて、天は覆ひ地は載せ、風は令し雨は施す。雨施すは徳を布くこと均しきなり。⑮ 風令するは、令を言ふこと直なり。⑯ 詩（大雅、皇矣）に云ふ、「識らず知らず、帝の則に順ふ」と。知識する能はずして、天の為す所に效ふを言ふのみ。⑰ 禹に水ありて湯に早するは、常経に非るなり。適々世氣の変に遭ひて、陰陽平を失す。⑱ 堯、民を視ること子の如くし、民、堯を視ること父母の如くす。『尚書』に曰く、「二十有八載、放勳乃ち殂落す。⑲ 百姓、考妣に喪するが如し。四海の内、八音を闕密すること三年」と。⑳ 三年、陽氣、陰に厭せられ、陰氣大いに興る。此れ禹の水の名有る所以なり。㉑ 桀は天下の残賊なり。湯は天下の盛徳なり。天下、残賊を除きて盛徳を得、大いに善なること再びす。是れ陽を重ぬるなり。故に湯に早の名有り。㉒ 皆適々遭ふの変にして、禹湯の過ちには非るなり。適々遭ふの変を以て平生の常を疑ふこと毋ければ、則ち守る所失はずして、正道（「正」の上、もと「則」の字有り。注によつて衍とする）益々明らかなり。㉓

〔義証〕

- ① 「知心」、疑ふらくは「治心」に作りしかと。
- ② ②下の「与」の字、各本「也」に作る。今、天啓本・凌本によつて改む。
- ③ 盧云ふ、「是」は疑ふらくは衍ならん」と。
- ④ ④官本、「其」を「是」に作り、「間」の下に「者」の字有りて、云ふ、「他本無し。陰与」は倒す」と。
- ⑤ ⑤官本に云ふ、「他本其」の下に「者」の字を衍す」と。
- ⑥ ⑥凌本、「及」を「乃」に作る。
- ⑦ ⑦凌本、「天」の下に「乃」の字有り。
- ⑧ ⑧盧云ふ、「天降物」、亦「大降物」に作る」と。興案するに、天啓本、「天」に作る。
- ⑨ ⑨「九」「究」、「十」「畢」は並んで同声なり。此れ字声を以て訓を為す。
- ⑩ ⑩凌云ふ、「徐整の『長曆』に、『北斗を歴、崑崙に当たり、氣、連りに天下に注ぎ、春夏は雨露と為り、秋冬は霜雪と為る』と。○官本に云ふ、「他本、『於』の字無し」と。
- ⑪ ⑪盧云ふ、「亶」、「但」と同じ」と。
- ⑫ ⑫天啓本、「当」を「常」に作る。凌本同じ。
- ⑬ ⑬句ぎる。
- ⑭ ⑭陰、陽の資化を受くるも、而も知らず。
- ⑮ ⑮凌云ふ、「帝通紀」に云ふ、「雨は、天地の施なり」と。
- ⑯ ⑯凌云ふ、「後漢書」張魯伝に、「臣聞く、風は号令を為し。動物は氣を通ず」と。注に、「翼氏風角」に曰く、「凡そ風は、天地の号令にして、人君に譴告する所以の者なり」と。
- ⑰ ⑰凌云ふ、「（詩経）大雅皇矣箋に、『其の人と為り古を識らず、今を知らざれば、天の法に順ひて之を行ふのみ』と。
- ⑱ ⑱「白虎通」災變篇に、「堯は洪水に遭ひ、湯は大旱に遭ふには、亦譴

告有りや。堯、洪水に遭ひ、湯、大旱に遭ふは、命運にして時然るなり」と。『御覽』に『文子』を引いて云ふ、「臣聞く、不善を為して災報じ、其の応を得るなり。善を為して災至るは、政の致す所には非ざるなり」と。

⑮今の孔伝本、「帝乃ち殂落す」に作る。此の文に拠りて、今文『尚書』「放勳」に作るを知る。『五經異義』、『説文』、虞書を引くこと並んで同じ。「勳」或いは「勛」に作るは、則ち字の異のみ。「殂」、或いは「徂」に作る。「殂名」に「徂落は、徂は祚なり。福祚殂落するなり。徂は亦往なり。往きて去落するを言ふなり」と。『爾雅』「殂」に李巡を引いて云ふ、「殂落は堯死するの称なり」と。『説文』歩部に虞書を引いて「落」の字無し。蓋し古文ならん。

⑯此れ当に亦今文『尚書』此くの如くなるべし。『白虎通』四時篇に『尚書』を引きて曰く、「三載、八音を遏密す」と。殆ど今文の異本なり。盧云ふ、「閼」と「遏」と同じ」と。凌云ふ、「八音は、金鐘、石磬、糸琴瑟、竹箎笛、匏笙、土埴、革鼓、木祝敔を謂ふなり」と。

⑰董、「春秋」の災異を説くに、凡そ大水は皆陰と為す。

⑱禹と湯と聖君を以て水旱の名を受く。故に厭陰重陽の説を以て解を為す。凌云ふ、「帝王世紀」に曰く「湯、桀を伐つの後、大旱すること七年。川洛以て竭く。人をして三足鼎を持し、山川に祝らしめて曰く、「政、節あらざるか。人をして急ならしむるか。讒夫昌んるか。宮室榮なるか。女謁行はるか。何ぞ雨ふらざることを疾しきや」と。何注、此れに同じ。

⑲下の「則」の字は、疑ふらくは衍ならんと。

〈本文通釈〉

天の道は、陽を（地上）に出しては温暖を實現して物を生長させ、陰

を（地上）に出しては寒冷を實現して物を成熟させる。つまり、（氣候の）稔やかさがなければ物を生育させることはできず、（氣候の）厳しさがなければ物を成熟させることができないというのが、一年ことの稔り（の實現の）精髓である。（そこで人も）心を治めて、稔やかさと厳しさのいずれが多く役割を持つものであるか反省しない場合は、それら（の稔やかさ厳しさ）を（やみくもに）運用して、必ず天に違背してしまう。天に違背すれば、どれほど苦心してもうまくいかない。

正月から十月までに天の（物を成長、成熟させる稔りの）働きは終わる。その間に、陰と陽とはそれぞれどれほど（物の成長に有効な場所）に存在するだろう。（また）稔やか（な日）と厳しい（日）とは、その日数はどちらが多いだろうか。物が初めて生まれる時からその成熟を終えるまでに、露と霜とはその降り方はどちらが多いだろう。すなわち、仲春から秋までは、気温は快く調和している。季秋九月に至り、陰が陽より多くなり始めるが、天はその時厳しさを現して霜を降す。厳しさが現れ霜が降りて、天が（地上に）降す物は（その段階で）もとよりすでに成熟している。従つて、九月は天の（物を生長させる）働きはこの月で最高潮に達するのであり、十月にはそれはすべて終わりを告げている。そこでその（天の働きの）跡を考え、その実質を調べてみると、寒冷な日や（氣候の）厳しい日はほんのわずかにすぎない。（そして、天の）働きが完成した後になつて、陰が大いに出現する。天の働きは、少陰はそれに与るが太陰は与らないのであり、少陰は（天の働きの）内にあつて、太陰はその外にあるのである。

この結果、（少陰の働きたる）霜は物に（直接）降るが、（太陰の働きたる）雪は（物が地下への收藏を終えた後の）空虚な空間に降るのである。その空虚な空間（にあるの）は、ただ大地のみであり、（この結果、雪は）物に逮ばない。（天の生長の）働きが終わつた後、物が再度生々を始める前が、太陰が大いに出現すべき時期である。陰と言うけれども、

それは太陽を素材として受けてそれなりのあり方へと変化し、それでいながら（陰自体は自分が）何を受けてできているかを知らない。

こうした次第で、聖主が上位にあり、天が万物を覆い、地が万物を載せ、風は号令（のように万物に氣）を送り、雨は（万物に）恵みを与える（という状態で、世界が存在するのが原則である）。雨が恵みを与えるというのは、（人君で言えば）徳が遍く等しいということであり、風が号令（のように万物に氣）を送るというのは、（人君の）号令の出方がよみないということである。（このように人、万物は太陽を体現する聖主、天に化育されながら、しかもその事実を知らないでいる。）詩經（大雅、皇矣）にも、「識らず知らず、上帝の掟に順う」とあるが、（これは）認識できないままに天の為す所に習うことを言うものである。

（かように聖主と天のあり方は一体であり、聖主があれば天地も原則通りに働くはずである。そこで）禹王の時代に洪水が起こったことや湯王の時代に早が起こったことは、原則に反する（天地の現象と捉えるべき）ものである。たまたま（禹と湯の時代が）時代の趨勢を決定付ける氣の異変に遭遇していたのであり、陰陽（の働き）が動揺していたのである。（というのは）堯は民を見ること子のようであった。民も堯を見ること父母のようであった。尚書（舜典）に、「（禪譲の後）二十八年にして帝（堯）が崩御された。民衆は父母の喪に服するようであり、世界中が八音を絶やして静寂を保つこと三年であった」とある。（この）三年の間、陽氣が陰氣に抑えられ、（他方）陰氣は大いに盛んになった。これが禹の時代に水害の話が残っている理由である。

（また）桀は、天下に鳴り響く残賊者であり、湯王は天下に聞こえた盛徳者であった。天下は残賊者を除いて盛徳者を得たが、（この際には）大いに善きことが二度起こったのであり、陽が二重に勢いをもったのである。そこで湯には早の話が残っているのである。いずれも偶然的の遭遇であって、禹王と湯王の過ち（の結果）ではない。偶然の遭遇の異変に

よって、平常の原則に疑念を抱かなければ、保守しようとするものは失われぬし、正道がいよいよ明らかになるだろう。

基義第五十三

（本文）

凡そ物には必ず合有り。① 合には必ず上有り、必ず下有り、必ず左有り、必ず右有り、必ず前有り、必ず後有り、必ず表有り、必ず裏有り。美有れば必ず悪有り。順有れば必ず逆有り。喜び有れば必ず怒り有り。寒有れば必ず暑有り。昼有れば必ず夜有り。此れ皆其の合なり。② 陰は陽の合なり。妻は夫の合なり。子は父の合なり。臣は君の合なり。物に合無きは莫し。而して合に各々陰陽有り。③ 陽は陰を兼ね、陰は陽を兼ね、夫は妻を兼ね、妻は夫を兼ね、父は子を兼ね、子は父を兼ね、君は臣を兼ね、臣は君を兼ね。君臣父子夫婦の義は皆諸を陰陽の道に取る。④ 君を陽と為し、臣を陰と為す。父を陽と為し、子を陰と為す。夫を陽と為し、妻を陰と為す。⑤ 陰陽は独り行く所無し。其の始めや専ら起こるを得ざるも、其の終はりや功を分かつを得ず。兼する所の義有り。是の故に臣は功を君に兼し、子は功を父に兼し、妻は功を夫に兼し、陰は功を陽に兼し、地は功を天に兼す。拳がりて上る者は抑へて下すなり。屏けて左にすること有るなり。⑥ 引いて右にすること有るなり。親しみて任ずること有るなり。疏んじて遠ざくること有るなり。日に益すを欲すること有るなり。日に損するを欲すること有るなり。其の用を益して其の妨を損す。⑦ 時に損少なくて益多きこと有り。時に損多くして益少なきこと有り。少なけれども而も絶ゆるに至らず。多けれども而も溢るに至らず。⑧ 陰陽の二物は、終歳各々壹たび出づ。其（「其」の上にもと「壹」の字有り。注によつて衍とする）の出づるや、遠近度を同じくして意を同じくせず。⑨ 陽の出づるや、常に前に

縣りて事に任じ、陰の出づるや、常に後に縣りて空虚（「虚」もと「処」に作る。注によつて改める）に守る。⑩ 此れ天の陽に親しみて陰を疏んじ、徳に任じて刑に任ぜざるを見すなり。⑪ 是の故に仁義制度の数は、尽く之を天に取る。天は君と為りて之を覆露す。⑫ 地は臣と為りて之を持載す。陽は夫と為りて之を生み、陰は婦と為りて之を助く。春は父と為りて之を生み、夏は子と為りて之を養ふ。（この下、もと「秋為死而棺之、冬為痛而喪之」の二句あり。注によつて衍とみなす）⑬ 王道の三綱は、天に求む可し。⑭ 天は陽を出し、暖を為して以て之を生み、地は清を為して以て之を成す。暖ならざれば生ぜず、清ならざれば成らず。然り而して其の多少の分を計れば、則ち暖暑は百に居り、清寒は一に居り。⑮ 徳教の刑罰に与ける、猶ほ此くの如きなり。⑯ 故に聖人は其の愛を多くして其の嚴を少なくし、其の徳を厚くして其の刑を簡にして、此れを以て天に配す。天の太数は必ず十に畢る。（もと「必有十句」に作る。卷十一陽尊陰卑篇の「天之太数、畢於十句」に關する俞樾注に従つて、「畢於十」に改める）⑰ 天地の数を旬（もと「旬」に作る。同前によつて改める）くするも、十にして畢く挙がる。生長の功に旬（同上）くするも、十にして畢く成る。⑱ 天の氣は徐ろにして、乍ちには寒く、乍ちには暑からず（もと「乍寒乍暑」に作る。注によつて句の上に「不」の字を補う）。⑲ 故に寒けれども凍えず、暑けれども暍せず。⑳ 其の（其）の下にもと「有余」の二字有り。注によつて衍とする）徐ろに來りて、暴卒（にはか）ならざるを以てなり。㉑ 『易』に曰く、「履霜堅氷」（坤卦、初六爻辭）と。蓋し遜を言ふなり。㉒ 然れば則ち上堅く等を踰えざるは、㉓ 果たして是れ天の為す所に於て、乍（もと）「作」に作る。注によつて改める）ちにして成らざるなり。人の為す所も、亦当に乍（同上）ちにして極めざるべきなり。㉔ 凡そ興すこと有る者は、稍稍として之を上し遜順を以て往き、㉕ 人心をして説びて之に安んぜしめ、人心をして恐れしめず。㉖ 故に曰く、

君子は人を以て人を治め、慥かに能く慰む、とは、㉗ 此を之れ謂ふなり。聖人の道は、諸を天地と同じくし、諸を四海に蕩かし、習俗を變易す。㉘

〔義証〕

①「合」は即ち偶なり。楚莊王篇（第二）に、「百物必ず合偶有り」と。『易』繫辭（上）に、「五位相得て各々合有り」と。『左（伝）』（昭公九年）疏、鄭注を引いて云ふ、「二五陰陽は各々合有りて、然る後に氣相ひ得て施化行はる」と。

②程子云ふ、「質に必ず文有るは、自然の理なり。理に必ず対有るは、生々の本なり。上有れば則ち下有り。此有れば則ち彼有り。質有れば則ち文有り。一は独り立たず。二必ず文を為す。道を知る者に非れば、孰か能く之れを知らんや」（『全書』卷四十）と。此の義と合ふ。

③物皆合ふ所有り。以て陰陽と為す。一物に就いて之を言へば、亦各々其の陰陽有り。身は背面を以て陰陽と為し、背面は又帶上帶下を以て陰陽と為す。山は前後を以て陰陽と為す。氣は清濁を以て陰陽と為し、質は流凝を以て陰陽と為す。鬼区臾言ふ、「陽中に陰有り。陰中に陽有り」（典拠未詳）と、是なり。宋の周子謂ふ、「陰陽は互みに根ざす」（『大極図説』）と。此に「各々陰陽有り」と云ふも、其の理一なり。

④「白虎通」綱紀篇に、「君臣父子夫婦は六人なり。三綱と稱する所以は何ぞ。一陰一陽、之を道と謂ふ。陽は陰を得て成り、陰は陽を得て序し、剛柔相配す。故に六人を三綱と為す」と。○凌本、「取」を「与」に作る。

⑤『說苑』弁物篇に、「其の民に在りては、則ち夫を陽と為して婦を陰と為す。其の家に在りては、則ち父を陽と為して子を陰と為す。其の国に在りては、則ち君を陽と為して臣を陰と為す。故に陽、貴にして、陰、賤に、陽、尊にして、陰、卑なるは、天の道なり」と。『漢書』杜欽伝

に、「臣は君の陰なり。子は父の陰なり。妻は夫の陰なり。夷狄は中国の陰なり」と。宋の徽宗の時、任伯雨亦言へり、中国を陽と爲し、夷狄を陰と爲す、と。欽説に本づく。興案するに、陰陽は不易の者なり。君臣父子夫婦の倫も亦不易の者なり。夷狄と中国と、『春秋』の義は則ち礼義に因りて進退を爲す者有り。故に董、以て言を爲さず。『韓非子』忠孝篇に、「臣の聞く所に曰く、『臣は君に事へ、子は父に事へ、妻は夫に事ふ。三者順なれば、則ち天下治まる。三者逆なれば、則ち天下乱る。此れ天下の常道なり』と。亦三者を以て並び挙ぐ。故に知る、三綱の説、其の来たる已に久しくして、其の理は『易』已に之を具かにせるを。

⑥○盧云ふ、「屏」の下、旧、「迸」を衍す。転訛して『送』と爲す。今、刪去す」と。

⑦○「益其用」、各本「益而用」に作る。盧云ふ、「疑ふらくは、是れ『益其用』ならん」と。今、改む。

⑧語は亦陰陽終始篇(第四十八)に見ゆ。

⑨義は亦天道無二篇(第五十二)に見ゆ。盧云ふ、「次の『壹』の字は、疑ふらくは衍ならん」と。

⑩當に「空虚」に作るべし。

⑪義は亦天道無二篇(第五十二)に見ゆ。○各本、「此見」を「而見」に作る。盧云ふ、「當に是れ『此見』なるべし」今、凌本に従りて改む。亦人副天數篇に見ゆ。

⑫(『国語』晋語(六)に、「則ち是れ先主(主)もと『君』に作る。原典によつて改める)、子を覆露す」と。韋注に、『露』は潤なり」と。『淮南子』時則訓の高注同じ。『漢書』晁錯伝に、「万民を覆露す」と。如淳云ふ、『露』は膏沢なり」と。又嚴助伝に、「陛下、德恵を垂れて以て之を覆露す」と。顔注に、「之をして潤沢ならしむるを謂ふなり」と。『釈名』釈天に、『露』は慮なり。物を覆慮するなり」と。

⑬二語は疑ふらくは衍ならん。下に云ふ、「三綱は天に求む可し」と。

當に此れ有るべからず。後人、春夏の二語に因りて妄りに加へしなり。

⑭「三綱」は、又深察名号篇(第三十五)に見ゆ。

⑮暖燠孰多篇(第五十二)、大同なり。

⑯○天啓本、「之」を「其」に作る。

⑰○凌本、「必」を「畢」に作る。

⑱陽尊陰卑篇(第四十三)に見ゆ。

⑲盧云ふ、「句の上に當に『不』の字有るべし」と。

⑳「喝」、は暑に傷つくなり。

㉑俞云ふ、「有余」の二字は衍なり(『春秋繁露平義』二二)と。

㉒今本『易』、「遜」を「順」に作る。『説文』(卷五十七)に、「『遜』は順なり」と。「『遜』、字同じ。案するに、『易』に「其の道を馴致す」(同上、象伝)と言ふ。「遜」の字を正しく馴の義に釈す。

㉓氷は霜によりて其の堅を馴致す。故に云ふ、「等を諭えず」と。『易』に所謂「由りて来たる者は漸なり」(坤卦文言伝)なり。

㉔盧云ふ、「両の『作』の字は俱に疑ふらくは『作』に作りしか」と。

㉕一法の興る、當に次第有るべし。過ぎて驟かにす可からず。故に曰く、「事に漸有れば、則ち民驚かず」と。

㉖○盧云ふ、「本」に「而不使恐」に作る」と。興案するに、天啓本、「無使人之恐」に作り、下に一字を空け、又「作而不使」の句有り。凌本、「無使人心恐而不安」に作る。

㉗盧云ふ、「懂」、當に「謹」と同じかるべし。大典、『謹』に作る。疑ふらくは非ならんか」と。興案するに、凌本、「懂而愚」に作る。疑ふらくは、是れ『中庸』の「改めて止む」の異文ならんか。

㉘盧云ふ、「此の下、文脱するに似たり」と。

〈本文通釈〉

あらゆる事物は対偶を有する。その対偶には必ず上と下、左と右、前

と後ろ、表と裏（の関係）が成立している。美があれば必ず醜があり、順があれば必ず逆があり、喜びがあれば必ず怒りがあり、寒さがあれば必ず暑さがあり、昼があれば必ず夜がある。これらは皆それぞれの対偶である。陰は陽の対偶であり、妻は夫の対偶であり、子は父の対偶であり、臣は君の対偶である。物には対偶を持たないものはなく、対偶はそれぞれ陰陽より成り立つ。陽は陰（の要素）を含み、陰も陽（の要素）を含む。（同様にして）夫は妻（の要素）を含み、妻も夫（の要素）を含み、父は子（の要素）を含み、子も父（の要素）を含み、君は臣（の要素）を含み、臣は君（の要素）を含むのであり、君臣、父子、夫婦のあり方は皆陰陽のあり方に（模範を）取る。

君は陽であり、臣は陰である。父は陽であり、子は陰である。夫は陽であり、妻は陰である。陰陽は（それぞれ）独断で行動することはない。（行動の）初めの段階では、（陰陽のどちらかが）一方的に動き出すことはできないが、（とは言え、行動の）終わりの段階では、その成果を（陰陽相互に）分けあうこともできない。（ここに陰が自己の功績を）兼する（献上して自己のものとしな）という意義があるのである。この結果、臣はその功績を君に献上して自らのものとせず、子はその功績を父に献上して自らのものとせず、妻はその功績を夫に献上して自らのものとせず、陰はその功績を陽に献上して自己のものとし、地はその功績を天に献上して自己のものとしな。

（陰陽は）高く上位にある者が、（他方を）抑えて下位に置く（という関係にある）のであり、（天は陰陽のいづれかを）退けて左（の卑い地位の補佐役）に置くこともあれば、引き上げて右（の貴い地位の補佐役）に置くこともあり、親しんで任務を与えることもあれば、疎んじて遠ざけることもあり、日ごとに増加させることもあれば、日ごとに減少させることもある。（これは、生々や創造の）作用を増進して、（生々、創造された事物を）阻害（する側面）を減らすものである。ある時には

（天が陰あるいは陽を）減少させることが少なく、増加させることが多いこともあり、またある時には減少させることが多く増加させることが少ないこともある。しかし（陰陽は）、どれほど減少しても、絶えることはなく、どれほど増加しても溢れることはない。

陰陽の二物は、一年中でそれぞれ一度ずつ（地上に）出現する。それらが出現する際の運行の距離は同じであるが、しかし、その意味は同じでない。陽が出ると、常に（中央南向きに立つ視点から見ても）前（南）に懸かつてその任務を遂行するが、陰が出ると、常に後ろ（北）に懸かつて（作用を示さない）空虚な位置にいつづける。このことは天が陽に親しんで陰を疎んじ、徳に任じて刑に任じないということを示しているのである。そのようなわけで、仁義と（それに基づく）制度のあり方も、すべて天に（模範を）取る。天は（宇宙の）君主となつて（万物を）覆い潤す。地は臣下となつて（万物を）持ち上げ載せている。陽は（陰の）夫（の立場）となつて物を生じ、陰は（陽の）妻（の立場）となつて物（の成長）を助ける。春は父（の立場）となつて物を生じ、夏は（春の）子として（物を）成育させ、秋は死（の役割を担うもの）となつて物を棺に入れ（地中に収蔵させ）、冬は哀痛（の役割を担うもの）となつて（枯死して地中に収蔵された物）のために喪を行うのである。

王道の三綱（君臣・父子・夫婦の三大人倫）は（模範を）天に求めることができる。天は陽を出し、温暖を実現し、物を生じる。地は陰を出して寒冷を実現し、物を成熟させる。温暖でなければ（物は）生じないし、寒冷でなければ成熟しない。しかし、その（陰陽）の多少の程度を計れば、暖熱が百に対して寒冷は一に過ぎない。徳教と刑罰の関係もこれと同様である。そこで聖人は愛情を尊んで厳格を軽んじ、徳を重厚にして刑を簡略にし、これによって天に並ぼうとするのである。

天の大多数は十で（一つの単位をなして）終息する。天地の（すべての）数に当てはめてもすべてが十で（一つの単位をなして）捉えられる。

(天の) 生長の働きに当てはめても十ですべて完成する。(このように十の段階を踏んで) 天の気はゆつたりと変化し、あつという間に寒くなったり、あつという間に暑くなったりすることはない。そこで寒くても凍えず、暑くても熱に中ることはない。ゆつたりと変化して、突然に変化することはないからである。『易』(坤卦、初六爻辞)に、「霜を履んで、堅い氷」とあるが、これは恐らく(変化に) 従い慣れることを言うのであろう。そうであれば、上部が堅実となるのは、(氷が固まるように、少しずつ行われ) 段階を踏み超えることではないのであり、予想されるようにこれが天の行為であつて、(それは) 突然に成し遂げられることではないのである。(そこで) 人の行為も突然(物事を) 極めてはならない。すべて何かを興すものはゆつたりと進めて慣らしながら従わせることのでき、人心を喜ばせ安心させるようにし、人心を恐れさせてはならない。そこで、「君子は人によつて人を治め、そこで謹み深くあることができる」と言われるのは、このことを言うものである。聖人の道は、天地(のあり方)と同じにし、世界中に影響を与えながら、習俗を変化させていくものである。